

[24] 武原はん

～空気の質を変える芸～

1994年1月14日 東京新聞 夕刊

幕が上がってその人が舞台にひとり立っているのを見たとき、私は思わずあたりを見回してしまった。何かが起こった。さっきまでと何かが違っている、そんな気がしたのだ。

地唄『寿』の前弾きが始まる。舞台の人に目を凝らすと、いまだ動かないその立ち姿は心うつろな人形の風情。しかし言いようもない鮮やかな輪郭を見せて、光と形とを一身に凝縮させたかと思われた。たしかに何かが違っている。そう、まるであたりに金銀の微粒子を撒きちらしたかのように、空気そのものが燐光を放っているのだった。

武原はんの舞をはじめて見たときのことである。それ以来、あの人の舞は狐つきだ、と思っている。私にしてみれば、それはとても良い意味なのである。舞や踊りというものは狐に化かされたような夢うつつの境に人を誘い込む、そんなものでなくてはならないと、本気で考えている。極上の舞踊は、あたりの空気の質を変えてしまうものなのだ。

* * *

舞はあまり体を動かさず、そのぶん精神的なものを表現すると、ふつう思われている。しかし筋肉を駆使して行われる肉体表現という、あらゆる舞踊に共通の大原則から言えば、日本舞踊であれ洋舞であれ、可能なかぎり体を使うことで究極をめざしていかないものなど、一つもありはしない。体を使わずに良い舞踊ができるものなら、さしずめ民話の『三年寝太郎』などは、そこそこの舞の名手になってもいい道理である。

日本の古典舞踊は、肩と肘をしっかりと後ろに引き、体の重心を垂直、つまり中心軸を曲げずに真下に下げること、基本姿勢が出来上がる。それによ

[24] 武原はん

～空気の質を変える芸～

1994年1月14日 東京新聞 夕刊

って外見はまことにそととしてカミのない、しかも安定した姿になるのだが、しかしそのためには二の腕と大腿の裏側に大変な力がかかるので、事実、名手といわれるほどの日本舞踊家は例外なくその部分にまことに立派な筋肉を持っている。ついでに言えば、脚を高く上げなければならぬバレエ・ダンサーはみな大腿の表側が発達しているが、しなやかでバネの効いた踊りをする人は、裏側に外からもそれと分かるほどの筋肉を持っているものである。

* * *

それならば日本舞踊は静止をもってその究極の境地とするかと言えば、そうとばかりも言えない。舞踊とは肉体の動きによって表現する芸術だから、まずは体を動かすこと、それ以外になすべきことはない。その意味では舞も踊りも、静止した印象とはうらはらに、めざましくも俊敏な動きを必要とするものであることは、なべての舞踊と少しも変わらないのである。俊敏なこととは、正確なリズムでということだが、日本流に「間を^ま外^{はず}さず」と言ってみると、あたかも短距離走者のスタートにおけるのと同じようなその緊迫感が伝わってくる。テンポの早いものであれ緩慢なものであれ、常に音楽と一体の舞踊には、瞬間々にそのような凝縮されたダイナミズム、ほとんど神がかりの素早さが要求されるのであって、それが不完全な舞踊は、どんなに姿勢が良くても見るにたえない。

もっとも、完成された舞踊というものは常に極度に静止したものだということのも事実で、逆説的なようだが、激しく動けば動くほど、実は動かないものなのだ。

たとえばバレエのグラン・フェットテという回転技

[24] 武原はん

～空気の質を変える芸～

1994年1月14日 東京新聞 夕刊

など、片足で回り続けているバレリーナ自身は、ただ前方の一点を見つめ、自分が完全に静止していると感じているのであって、その感覚は日本舞踊家が微動だにせずにいる時の心持ちと非常に良く似ている。言うならば舞踊とは、筋肉の躍動の限りをつくして静止の一点を目指すものなのだ。それはちょうど、文学的な言語が、言葉の限りをつくしてなお、行間という沈黙によって完成するのと同じことである。

静と動との絶妙な配合のなかに、理想的に刻み込まれた肉体の形状を浮かび上がらせること、それが優れた舞踊の処方箋である。そしておそらくはそのような瞬間だ、劇場空間に一種言いたい燐光がみなぎるように思われるのは。匂いと言ってもいい、おののきと言ってもいい。あたりの空気の質が変わってしまふのである。そして奇妙なことに、そのような空気のなかで、踊り手の存在もまた、どこか希薄なものになっていく。踊る人と観る人の間で、ただ純良な舞踊空間のみが、それ自体、生き物のように息づき、踊る人はそれに身をゆだね、観る人もまたその空間に包みこまれて、自らの梢神の自在な動きを取り戻す。本来に良い踊りを見ているとき、人はただ踊り手の動きを追っているというだけではない。その動きに触発されつつ、実は精神が自分なりに理想的な動きをし始めるのである。

日本の舞踊は、空気の質を変える芸としてとりわけ優れたものを持っているように思う。たとえば『雪』。つとそむけた舞い手の背から、心も凍える寒気が立ちこめる。そして『山姥』では、遠くさまよわせた眼差しが、客席を全山の花の雲に変えるのだ。

[24] 武原はん

～空気の質を変える芸～

1994年1月14日 東京新聞 夕刊